

防災活動を通じて地域のあり方考える

コンセールのとで12月14日、中学生防災フォーラムが開かれ、町内の中学生17人が参加しました。

昨年9月に行われた町総合防災訓練では、中学生が各避難所の運営にあたるなど、重要な役割を果たしました。より良い防災活動につなげるため、参加した生徒たちは訓練を通じて気づいたことを振り



返り、感想を述べ合いました。各避難所で生徒が行った活動は、避難者の受付や間仕切りの設置などでほぼ同じ内容でしたが、一人一人の生徒が感じた思いはそれぞれ違うものでした。フォーラムには防災工学を専門とする群馬大学大学院理工学府教授の片田敏孝さんが参加し、訓練を通じて得た生徒の「気づき」に耳を傾け、講評を述べました。

今回の訓練のメイン会場となった柳田中。800人を超える人が避難しました。生徒は学年ごとに避難者の受付や整列、間仕切りの設置などにあたりました。生徒は「避難してきた人に声をかけるのは少し恥ずかしかったけど、笑顔で対応することの大切さを学びました」「私たちも、地域の住民の一人として、いろいろな活動ができるということを知りました」と訓練を振り返りました。訓練を通じて地域との関わりについて考えを巡らせることができたようです。



柳田中学校

松波中学校

生徒は避難者の受付や段ボール製の間仕切り設置などを行いました。受付にあたった生徒は「自分の親くらいの年齢の人が少ないのが気になった」と振り返りました。



能都中学校 生徒は間仕切り設置の練習など、事前学習を行っていましたが、小学生に設置方法をうまく説明できなかったり、一般の参加者が説明書を読まずに組み立て、バラバラになったりするなど、当日は問題に直面しました。プラカード係は「カードを立てる道具があれば介助が必要な人の手助けなど別の仕事もできるのではないか」と気づきました。訓練後、生徒たちは授業で発生した問題を振り返りました。より良くするにはどうすればよいか、防災を通じて「生きかた」を学びました。

間仕切りの設置では、同じようなパーツがたくさんあって苦労しましたが、その様子を見た大人が手伝いをはじめ、地域の人との共同作業で完成させることができました。地域の大人から「ご苦労さま」「ありがとう」という言葉を掛けてもらった生徒たちは、訓練の手応えを感じたようです。

小木中学校

2つの高台に小学校と中学校がそれぞれ建っている小木地区。住民は自宅から近い避難所に避難しました。

生徒は「お助け隊」として、グループホーム利用者を介助し、避難所に案内しました。暗くなると自動で点灯する「ペットボトル」で避難場所を示す取り組みや、防災体操・防災カルタの実演など、避難所に集まった地域の人に防災活動を紹介しました。子どもやお年寄りなど、地域の人を率先して助けられるよう、訓練を振り返りました。



群馬大・片田敏孝教授が生徒にエール

東日本大震災で岩手県釜石市の小中学生生ほぼ全員が助かった「釜石の奇跡」と呼ばれる防災教育をもたらした片田教授が「能登町の中学生へのメッセージ」と題し、生徒の活動に対して次のとおり講評しました。

訓練のとき、地域の大人が手伝ってくれたり、お礼の言葉を掛けてくれたという発表

がありました。中学生である皆さんが地域のために頑張っている姿を見て、大人は喜んでいます。そして大人自身も「これでいいのか」と考えています。皆さんが地域の雰囲気を変え、大人の参加意識を掘り起こし、防災だけではなく「もっと良い地域になるように」と、前向きな心をもたらししました。防災訓練は災害時の実際の対応を身につけるだけではなく、皆さんが地域のことを大切に思うことで、地域のまとまりを生みだしました。



生徒に訓練の意義について語りかける片田さん

中学生の皆さんが訓練をまとめた意味は大きいです。今後もみんな考えて知恵を出し合い、防災の取り組みに反映させていってください。



片田さんを中心にぐると弧を描いて座り、意見交換した

防災は何のため？ 能都中「生きかた科」

よい「生きかた」探る 答えのない授業

能都中学校には「より良い生きかた」を学ぶ時間があります。その名も「生きかた科」。年間15時間が設けられていて、防災を核にし、人生を生き抜くために必要な力を身につけます。



12月15日に行われた2年生の「生きかた科」授業は、生きていく上で避けられない「決断」がテーマです。生徒一人一人が自分で考え、結論を出しました。

問題1

能登半島沖で大きな地震が発生しました。家族が家具の下敷きになっています。あなた一人では助けられません。

もうすぐ大きな津波が来ます。下敷きの家族は「逃げなさい」と言います。あなたはどつしますか？

A 逃げる
B そばにいる



短時間で決断し、結論をホワイトボードに貼り付ける生徒

決断は自分自身で、ほんの短い時間で下さなければいけません。自分と違う決断をした人の意見を聞いて、いろんなことを考えよう。



廣澤孝俊先生

A 逃げる…34人

- ・一人でも多く助かったほうがいいから
- ・自分が死ぬのは嫌だから
- ・大切な人が「逃げて」と言っているから
- ・どうせ助けられないので、そばにいたくないから

B そばにいる…13人

- ・後悔して、生きていく自信がなくなるだろうから
- ・思いを引きずるより楽だから
- ・大切な人がいなくなると、生きていくのがつらいから

問題2

能登半島沖で大きな地震が発生しました。あなたは家具の下敷きになってしまいました。

もうすぐ大きな津波が来ます。下敷きになって動けないあなたは、そばにいる家族に何と声をかけますか？

A 逃げて
B 一人で死ぬのは嫌だ



全員が「A 逃げて」

- ・家族が死ぬのは嫌だから
- ・逃げてほしいから
- ・自分が死んでも、家族には生きていてほしいから

生徒は、どちらの問題がより難しかったかを討論し、理由を述べました。家族の絆が、決断を難しくしていることを実感できたようです。

そばにいたいという気持ちもあるけど、逃げたいという気持ちもありました。



廣澤先生から「こんなつらい決断をしながらでも良い方法があるので考えよう」と提案を受け、生徒はグループで意見を集約しました。出された結論は、「家具を固定する」「家族で話し合っておく」「防災訓練をする」といったごく簡単なことでした。



生徒が導きだしたより良い生きかたのヒント

その時にできることを
全力でやっておくことが大切

片田敏孝先生が授業を見学し、
生徒にアドバイスしました



命にかかわる決断を迫るのが「災害」で、決断を回避できる方法が「防災」です。人間が決断しようがしまいが、みんなの都合に関係なく災害は襲ってきます。どうやったら一人でも多くの命を救えるのか。きょうの問題で皆さんが悩んだのと同じく、僕も悩みました。

人生には悩んだ末に、結論を出せない決断があります。「あの時にああしておけば良かったな」ということがたくさんあります。

最後に話を聞いて「なーんだ」と思ったかも知れませんが、簡単なことをしておくことで、過酷な決断をする必要がなくなります。知識として家具を固定しなければならぬことは、みんなが知っているけど、どうして行動に移せないのか、理由を考えてください。

災害は厳しい決断を迫ります。つらいことは考えたくないけど、「もし我が身だったら、自分が被災者だったら」と考え、被災地の経験に学び、自分の知識と結びつけてください。